



文部科学省 IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL



本田詩温氏(静岡サレジオ小学校)

中学校の数学教師を目指しつつ、小学校の免許も取得。大学卒業後、小学校の教師に。
現在、2年生の担任として音楽・英語以外の全教科を教える。IB教育歴・教員歴ともに2年目。

「IBプログラムを通じて、自発的に問題に取り組んで世の中を引っ張っていく存在を育てる喜び」

子どもが自ら関心を持ったことについて問いを立て、
探究できるようになることを応援したい

IB教育については、サレジオ小学校に声をかけていただいたときに、HPを見て初めて知りました。IBの研修はオンラインでしたが、感想は一言で言えば「難しい」。子ども達が将来どのようになってほしいかということを想像して、そこからどのような力をつけるかというのを逆向きに考えてやっていくのがIBであると思いました。IBカリキュラムで特徴的と思うことは、「学習者像」であり、「探究」であると思います。どのような場面でも学習者像、こういう人を目指したいというものが出てくるのが特徴だと考えています。

大学で教育について学んでいたときも新しい学習指導要領だったため、その後、IB教育に携わる中で教育に対する観方が大きく変わったということはありませんでしたが、IBでは、子ども達がなぜそれを勉強しなければいけないかということをわかって学習しているところが従来の日本の教育とは異なると思いました。私が受けてきた教育では先生が教えてくれて、「よくわからないけど、やらなければいけないから勉強していた」という状態でしたが、IBでは「自分が気になることがあって、それを解決したいから」、また「その解決のためには、この勉強が必要だから」という自発的な目的をもって勉強しています。

IBの教師として心掛けているのは、「どのような立ち位置にいるか」という点です。探究をするために必要な知識やその学年で身に付けるべき知識はきちんと教えますが、探究するときには、子ども達が自分で気づけるよう引っ張ってあげるようにしています。また、一緒に話していく中で、私にもわからないことがあれば一緒に考える立場、見守る立場など、その都度変えられるように気を付けています。探究は私

たち教師がさせるのではなく、子どもが自分が知りたいからやっていると思ってほしいので、いっぱい問いを考えることで引っ張っていったあげられるようにしています。

「鍵」を使えるようになれば、小学生でも探究できる

小学生の「探究」について、最初は足場づくりの必要がありますが、それが進めば、あとは自分達で気になって調べたり、どういう変化があったということに気づいたりできるようになります。学校でやったことを家庭でもやってくれる子も多く、小学生でも「探究」はできると思います。PYPの概念学習については、サレジオでは「鍵」と呼んでいるのですが、鍵の使い方を勉強するようにしています。特徴・構造の鍵なら、それを使うための質問を「どういうもの?」「どういう色?」と、具体的に子ども達から出る言葉でたくさん考えた後、写真を1枚見て、特徴の鍵を使ったら分かることを書き出すというものです。これを繰り返しているうちに、子ども達もいつも鍵、つまり重要概念が頭の片隅にあるようになり、一般の教科、たとえば国語などでも「今、主人公は変化・変容の鍵を使っただね。」など、子ども達自身がいろんな見方ができるようになってきたことを実感しています。

IB教育には「セントラルアイディア」、いわゆる学びのテーマがあるので、いつでも必ず「ここに戻ろう。これを知りたいから、これをやっているんだ」ということで、学びにつながりを持つことができ、教科横断がしやすいと思います。また、保護者の方からも「学校で探究のやり方が身に付き、家庭でも休日におさかな教室に行くなどして、気になったことを自分でどんどん探究するということができるようになっていっていると思います」という声をいただき、自発的な学びの姿勢が育っていることを感じています。

I B教育が世の中を牽引する人材を育てる

教員同士では、週に1回、学年ミーティングで、探究についてどこまで進んだか、今後どうするかなどの話をして、すり合わせをおこなっています。また、「授業づくりにおいて、ここが難しい」といった相談をするなどコミュニケーションを取っています。I B校の教師は、「探究」のおかげで、ともに学んでいこうということが自然とできるのだと思います。静岡サレジオには、小学校だけでなく、幼稚園から高校まであるのですが、公開授業期間があり、他の学校種の授業を見学するなかでも、大きな学びを得ています。

もしI B教育をやめるとなれば、どのように教科横断をするのが難しいと感じます。新学習指導要領にも「教科横断的に」と書いてはあるものの、教科書は別々ですし、それをどうつなげるのか悩んでしまいます。また、生活指導をする際にも「それは本当に『考える人だったの?』」のように学習者像を使った問いかけをしているので、それをどういう言葉に変えるのかなとも思います。I B教育は、「これを解決するために必要だからやろう」と子どもが自分で考えて取り組む姿勢を育てるために、とても重要なものだと考えています。

上の学年と関わる機会もあり、エキシビジョン（学習発表）の授業では4年生のメンターに付いています。4年生は、4年間分さまざまなセントラルアイディアで探究しているので、いろいろな見方ができるようになっていますし、また、日本や世界など広く大きい問題を扱えるのだということもわかります。きっと大人が問題としているようなことも探究できるのではないかと思います。そして、I B教育で学んだ子どもは、社会に出ても自ら問題を見つけ、鍵を使ったさまざまな見方で必ずどこかに解決策があると考えて、より良い策を見つけて世の中をどんどん引っ張っていくような存在になるのではと楽しみです。

現在も、3年生が草薙の町と関わって、「草薙カルテッド」として地域の人と交流しながら、地域をより良くするための実践を行っています。例えば、「大丈夫バッジ」というものを作って、それを持っている人がいたら「大丈夫?」と声を掛けるのはどうか、など具体的な提案も行っており、学校の中で学ぶだけでなく、地域コミュニティへの貢献もできていると思います。

物事を知ること、「好き」「楽しい」が増えていく

これからI Bの教師を目指したいという方にお伝えしたいこととしては、探究するときは、クラスの子と話しながら進

んでいくので、信頼関係を築くためには学級経営が基本であるということ。どのようなクラスを作っていきたいかということイメージしておくのが良いと思います。当たり前のことはきちんとできたうえで、楽しく探究できればと思います。

私が教員になろうと思ったのは、自分が算数嫌いだったので、算数が好きな子どもが増えてほしいという願いからです。もともと勉強は好きだったのですが、数学を通して「自分が嫌いだと思っていたことが好きになれる」という経験をしてびっくりしました。そして、嫌いというのは、何か知らないだけ、見えていないだけで、それが分かることで「楽しい」「好き」と思える。「好き」が多いほうが楽しいので、子どもの「好き」と思えることを増やせばいいなと思いました。数学が好きになったきっかけは、証明の問題がきれいだなと思ったことです。私は自分に自信が持てない子だったのですが、証明は、書ければ、そのことは自信を持って正しいと言えるということが嬉しく思えました。そこから勉強してみたら、意外と分かるので、分かるって楽しいなとか、全部のことに理由があるのは楽しいなと思えるようになりました。

子どもとともに探究を楽しむ教師を目指して

I Bの数学は、探究的に何かを解決したいということがあります。日々の他教科の授業と算数の授業とが別々のものとして存在するのではなく、つながりをもって学んでいくことが特徴だと思います。例えば、生活科で育てた野菜の成長を「消しゴム3個分大きくなった」と表現した場合、「消しゴムの大きさはそれぞれ違うよね。じゃあ、どうする?」と考えるなかで、「センチ」という単位があるという話に自然につながっていくのがI Bらしいなと思います。問題を与えられるのではなく、自分で見つけて、新しい勉強に入っていくというのがI Bらしさです。宿題では、基本的な知識を身に付けてほしいので、普段はドリルなどを出しますが、長期休みのときは、次の探究に入るきっかけになるようなこと、例えば冬休み明けに文化について考えるにあたって年末年始にしたことなどを書いてくるといった課題を出したりしています。

自分自身のキャリアとしては、探究を子ども達と一緒に楽しめるようになるといいなと思っています。今は、どうやって子ども達に探究をやらせようか計画を立てているものの、探究は広がっていくので、まとめるのが難しいと感じています。それでもその難しさに早く慣れて、子ども達と一緒に新しくわかるようになることや突き詰めていくことが楽しいと思えるように私自身も成長していきたいと考えています。